

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第823号 平成26年10月23日

君は「ルフィ」になれるか？（2）

常見氏は「僕たちはガンダムのジムである」という本を書いています。その中で彼は、アニメ「機動戦士ガンダム」というのは我々が生きて来た企業社会の縮図だと述べています。つまり、「地球連邦軍」も「ジオン公国軍」も、まるで企業のような存在だということです。しかも彼は、自分は「ガンダム」ではなく、「ガンダム」のジムのよう存在だという事に気付かされ、衝撃を受けたと述べています。

「ガンダム」のジムというのは、量産型で、よくやられる存在です。常見氏は、「自分はガンダムだ、主役だと信じているのだが、仕組みられた自由や幻想に踊らされ、いつしかジムのようになっている。会社にも社会にも埋没している」と述べています。

こうした世界観で「ONE PIECE」を見れば、「ルフィ」にさす太陽の光は如何にも眩しいに違いありません。

しかしだからといって、常見氏は、ジムとしての存在に絶望している訳ではありません。何故なら、世の中は99%のジムのよう普通の人で動いているからで、だから、そこから逃げてはいけなく、それを卑下してもいけないと述べています。彼はまた、こうも述べています。「冷たい絶望を熱い希望に返還する力。僕たちは、この力が必要だと思っている。それは個人だけではできないから、それを応援してもらうこと、応援してあげることが大切だ。この冷たい現実を楽しみ尽くすスタンスも大切だ」

つまり、いくら「ガンダムのジム」だといっても、孤立してはだめだという事ではないでしょうか。

「ONE PIECE」の読者は、自分は「ガンダムのジム」だと充分気付いていながら、いや、気付いているからこそ「ルフィ」に憧れるのかも知れません。

最後に、関西大学の安田雪教授（社会学）は、「ONE PIECE」の異常な人気ぶりについて「なんて不健全なんだろう」と述べています。

安田教授が不健全だと指摘しているのは、「ONE PIECE」の中身の事ではなく、「物凄い数の人々が『ルフィやナミが羨ましい。私だって仲間が欲しい』と願い、憧れ、涙を流しワンピースを読んでいるのに、自分の目の前にいる人とはつながろうとしない」という、そんな社会のありようそのものです。

安田教授は、彼女の著書「ルフィの仲間力」の中で、「ルフィ」が「海賊王になる」

という夢を掲げて大海原に飛び出したが、それは、学生が社会に飛び出す事や、会社で新しい仕事にチャレンジしようとする事と同じだと述べています。そして同時に、「新しい世界には、あなたが納得できないような正義を振りかざす人や拘束しようとする人、中にはあなたの夢を壊そうとする人もいます。そんな人たちを相手に、ルフィたちのように自分の信念を曲げずに夢を追い求めていくのは、確かに並大抵のことではありません」と、現実社会の厳しさを指摘しています。

「ONE PIECE」の読者は、描かれている世界が非現実的な事は百も承知の上で、多かれ少なかれ「ルフィ」のような生き方がしたいと思っているのではないのでしょうか。それは、「ルフィのように仲間を大切に、仲間と一緒に何かを成し遂げたい」という事でもあると思います。

「ONE PIECE」のコンセプトは、「仲間を大切にする」という事だと思います。

それは、簡単なようで簡単ではありません。

安田教授は、大学で接する学生達は、周りに対してとても気を遣っているし、その場に順応する能力が高いが、それだけでは本当の仲間は作れないと指摘しています。

安田教授は、その著書「ルフィの仲間力」において、「仲間を集める方法」「仲間と助け合う方法」「仲間との信頼を強める方法」「仲間と一緒に成長して行く方法」について、「ONE PIECE」を教科書に論じています。

「ルフィの仲間力」を読んでいて私が強く感じているのは、仲間を作る上で「自分の考え方、生き方に信念を持つ」事こそ最も重要だという事です。まさしく、「ルフィ」は信念の塊のような存在ですが、「信念を持って行動する」それなくしては仲間同士の強い絆は作れないと、私は思います。

常見氏と出雲氏や安田教授との「ONE PIECE」に対する評価は二分しているように見えますが、「信念を持って生きる」事の重要性を語っている点で、共通しているといえるでしょう。（塾頭：吉田 洋一）